

# 関西の双盤念仏（鉦講）と双盤鉦

坂 本 要

はじめに

双盤念仏は尺鉦といわれる半径一尺もしくは一尺一寸の大きな鉦を横叩きに叩きながら念仏を唱えるもので、もとは双盤の名にあるように二枚鉦を向かい合わせにして僧が叩き、浄土宗の儀礼として成り立ったと思われる。念仏は引声の称えである。引声念仏に双盤鉦が伴ったのは双盤鉦の出でくる江戸時代の元禄（一七〇〇年）ころと考えられる。この双盤鉦は民間に下降し、法要の一端を担うなどして、独自の叩き方を編み出して現在に至っている。筆者はすでに全国の双盤念仏の報告を記している<sup>〔1〕</sup>。この稿は関西にひろがる在俗の方による双盤念仏を中心にした事例報告である。僧侶による双盤念仏に百万遍知恩寺、清涼寺、西山浄土宗の白木念仏がありそれも記した。

関西は四十一ヶ所の調査をしたが、分布は滋賀県の安土浄厳院に発する楷定念仏地区とその他の地区に分かれる。楷定念仏地区は雲版太鼓と双盤鉦を用い、他は双盤鉦のみである。楷定念仏に関しては滋賀県安土以南の蒲生・野洲・守山・栗東と甲賀を含む浄土宗約三百ヶ寺に遍く行われていたといわれている。その他の地区の現行の在家双盤念仏は事例のごとく京都三ヶ所（地念仏といひ真如堂の影響が強い）、奈良二ヶ所、和歌山一ヶ所、兵庫一ヶ所と少ない。

しかし融通念仏宗・浄土宗西山諸派でも僧が叩いており、双盤鉦の残っているところは多い。

## 一 楷定念仏

1 安土浄厳院 滋賀県近江八幡市安土慈照寺 (一九九九/一〇/九・二〇〇〇/一〇/九・二〇一五/三/八調査)

楷定念仏は安土浄厳院(近江八幡市)が元であり、雲版と双盤鉦で称える念仏で、滋賀県の湖南地区から甲賀地区一带に広まっている。天正七(一五七九)年織田信長の命によって行われた日蓮宗と浄土宗の論争、安土宗論で浄土宗が勝利したことで、一名勝鬨かちどき念仏ともいわれる。勝鬨の名は日淵の記した『安土宗論実録』には浄土宗が宗論に勝った「其時総人数一同二関ヲ瞳ト上ル」からきている。安土の宗論は織田信長の対法華宗に対する弾圧や宗教政策としてあらかじめ仕組まれた騒動であり、事後処理をふくめてその後長く語りつがれるようになった。<sup>(2)</sup> 楷定念仏が成立したとき、当時敷衍された勝鬨の名がついたと思われる。

安土問答は歴史的事実であり、法華宗の僧侶の袈裟をはぎとり、その時とところ構わず鳴り物のすべてをたたいて喜んだことに発する念仏といわれるが、何故禅宗の鳴り物である雲版が使用されたのか、いつ現行の叩きや念仏の唱えが成立したのか不明であり、起源伝承として安土宗論の話が伝わっている。<sup>(3)</sup>

「楷定」の語は善導の『観経疏』の最後に「某今此観経の要義を出して古今を楷定せんと欲す」と記されている。語で『観経疏』自体を『楷定疏』<sup>(5)</sup>とも言った。意味は法式を正し解釈を定めることを意味する。浄土宗の中では一般化された言葉であった。

かつては十月二日から六日までを十夜とし、三日と五日の夜に楷定念仏を行なった。

現行では十月九日の十夜日中法要に維那いのの僧一人が双盤と太鼓をたたき、在家二人が双盤三枚で合わせ鉦をたた

く。「民間念仏信仰の研究 資料編」(注5参照)の写真では僧が双盤も叩いている。近辺の寺でも叩いているが、譜を作って統一している。楷定念仏は法要の僧の入堂前に始まり、念仏が行われている間に着座する。

叩き方称え方を、簡略に順を記すと以下のようなになる。初めの部分は「歌念仏」といい、音頭と大衆が掛け合いながら、互いに三唱し、それを三度繰り返す。それから鉦と念仏を称えるが何々打ちは鉦を強く叩く回数で、流しは鉦のみである。【楷定念仏3(掛け念仏) × 3 ↓ 三ツ打・二ツ打・一ツ打・曲打ち ↓ 中流し ↓ 一ツ打 ↓ 曲打ち ↓ 大流し】別に回向鉦といつて説経台に上つて僧侶の称える念仏があった。

現存する雲版の年号はなく、双盤鉦の二枚は元禄四(一六九二)年二枚、伏せ鉦を吊るした安永七(一七七八)年一枚で、双盤念仏の鉦からみて楷定念仏の成立は安土宗論のしばらくしてからのものであろう。

双盤二枚 元禄四(一六九二)年、吊るし鉦 一枚 安永七(一七七八)年

雲版銘 (表) 近江国蒲生郡安土浄厳院什物 (裏) 先祖代々實譽修月浄真居士 宣三浄月妙真大姉 施主中野村小嶋十

兵工 金屋村松吉佐兵工作

双盤銘 (二枚同じ) 元禄四未天五月十五日當院法書代 施主鷹飼村住清右工門 江笈蒲生郡安土浄厳院扣鐘  
為清譽浄光円譽妙音教譽道白白譽妙林林譽知覚菩提也 (安永七年足がついている伏せ鉦を双盤枠に吊るしたもの)

浄厳院の楷定念仏は旧安土町と旧近江八幡町(現近江八幡市)の安土町・金田村・武佐町・老蘇村の十五ヶ寺によつて維持されていた。中筋組八ヶ寺・街道組(中山道)五ヶ寺と浄厳院・塔頭寺誓要院の十五ヶ寺である。

中筋村八ヶ寺 ◎正念寺(安土町) ◎法恩寺(鷹飼町)・地藏院(金剛寺町)・光明院(金剛寺町) 應現寺(鷹飼町) 永福寺(長田町) 正寿院(浅小井町) ◎法泉寺(野田町)

街道組五ヶ寺 福生寺(東老蘇) 東光寺(西老蘇) 西福寺(西生来町) 浄宗院(武佐町) 法性寺(長光寺町)

各寺院で楷定念仏が行われていたが現在は◎印の寺に残っている。次に調査した寺を記述する。

2 法恩寺 滋賀県近江八幡市鷹飼町

(二〇一五/三/八調査)

旧蒲生郡金田村にある寺で十一月の十夜の夜に行う。楷定念仏のことを太鼓念仏という。寺方(僧侶)が叩くが、昔は双盤鉦を在家の人が叩いた。別に双盤鉦で叩く六字詰めを念仏があり、女の人が亡くなると百万遍を繰り六字詰めを称えた。現在雲版の枠に双盤鉦を吊るしている。双盤は一枚で年号はない。

双盤鉦銘

京都大仏住 西村左近宗春作

3 法泉寺 滋賀県近江八幡市野田町

(二〇一五/八/五調査)

十一月中旬の十夜に楷定念仏を行う。太鼓(平太鼓)と双盤鉦(片盤一枚)で叩く。歌念仏↓一つ流れ三・二・一↓中流れて終わる。昔は曲打ちがあった。在家の人がやっていた。別に地藏盆に片盤で叩き六字詰めを称えて百万遍を行う。尼講の人が亡くなるとお通夜の時「お別れ」と言って片盤で六字詰めを称える。双盤鉦年号なし。

双盤鉦銘

江州蒲生郡野田村法泉寺什物 墨書 あり(不明)

4 正寿院 滋賀県近江八幡市浅小井

(二〇一五/八/五調査)

楷定念仏は太鼓念仏といひ十月十八・十九日に近い土日に行う。十人衆という在家の年長者で五重相伝を受けた

ものが羽織袴で双盤をたたく。十人衆は年長者順で欠けると次の人が入る。他に尼講があり毎月集まって伏せ鉦をたたく。双盤鉦は一枚で年号なし。

双盤銘 金屋住松吉佐兵尉 藤原春近作 (墨書) アサコイ正壽院

二 滋賀県湖南・甲賀・三重県伊賀

5 西光寺 滋賀県竜王町山之上

(二〇一五/三/一四調査)

西光寺は浄嚴院の末寺で楷定念仏が伝わっている。御忌五月末日・十夜十一月・両彼岸の年四回行われる。楷定念仏は一時中断していたが法然上人七百五十年遠忌を機に復興現在に至っている。鉦講といひ五重相伝を受けた組ごとに講を担っている。現在は平成元年に受けた九名が鉦講を組み、この年新しい双盤鉦を寄付している。

楷定念仏は僧の入堂・退堂の時に称え、法要の中で「六字詰め」の念仏を称える。雲版・双盤は在家の人が叩く。楷定念仏は〈歌念仏↓雲版と双盤の掛け念仏↓大流し〉の順であるが、始めの部分は念仏を歌うように称えるので、「歌念仏」という。そのあとに雲版・太鼓と双盤が掛け合う形になる。六字詰めは雲版と双盤を同じように叩く。双盤鉦は六枚で二枚は古く一枚に宝永四(一七〇七)年の銘がある。他は平成元年のものである。太鼓の支え台に寛政四(一七九二)年の陰刻がある。双盤枠の下板裏に墨書がある。

双盤銘 宝永四年丁亥年正月吉日 江州蒲生上郡山野上村西光寺什物 為父梅岸道悟梅寛貞雲 施主京寺町鍵屋市兵工

京大佛住西村左近宗春作

太鼓支え台 寛政四壬子年仲春 世話人勘蔵西出源八源六 双盤枠下板裏(墨書) 大□□□西村左近

6 報恩寺 滋賀県野洲市南桜

(二九九九／一／一四・二〇二四／一／一四調査)

淨嚴院の末寺で、十一月十四日の夜に十夜の法要に行う。親鉦である雲版と子鉦である双盤で行う。双盤鉦は三枚。まず鉦講は法要の前に須弥壇裏の半鐘を七五三の「下がり打ち」で叩く。ついで「前座」の楷定念仏を称える。楷定念仏は雲版太鼓と双盤で念仏は上の上・上の中・上の下と三回唱え、その間僧が入堂する。法要中「光明遍照——」の撰益文に続いて鉦講の「六字詰め」が入る。六字詰めは上の段(上↓中↓下)中の段(上↓中↓下)下の段(上↓中↓下)の九回の念仏をだんだん早く称え、早鉦になって終わる。雲版と双盤の掛け念仏になっている。法要の終わりは「ハライ」と言つて一人で二枚の双盤鉦を並べて叩き僧が退堂する。説教師が来る場合も前座で着座、ハライで退座する。葬儀から四十九日の満中や月忌には百万遍があり、六字詰めを称える。鉦講は青年団・消防団につぐ年寄りの組である。

双盤鉦の一枚は宝暦五(一七五五)年、雲版は宝暦九(一七五九)年、半鐘は延寶八(一六八〇)年である。

双盤鉦	江劔野洲郡南桜村報恩寺常什物	響誉代	施主鐘講中	岨宝暦五乙亥年十一月十五日宝暦九年(墨書)	京大佛住
	西□□□宗春作				
雲版鉦	江州野洲郡南桜村報恩寺什物空誉代	為昭覚道雲信土菩提	施主国松頼平	宝暦九巳卯十月	
半鐘鉦	江劔野洲郡南桜村報恩寺什物	奉寄進	施主南井八右工門同又兵衛与兵衛	延寶八庚申年二月吉日	

7 安楽寺 滋賀県野洲市市三宅

(二〇〇〇／三／二五調査)

三月二十四日二十五日の御忌に鉦講を行う。鉦は親鉦の雲版と子鉦の双盤鉦四枚で行う。法要の前や説教の前に叩き僧や説教師が入堂着座する。二十四日二時・七時半・二十五日二時に法要がある。本堂内や雲版に柳の飾りが

設けられている。まず鉦講の人が半鐘を叩き始まる合図をして唄念仏↓佗々利↓前佗を称える。佗々利はブツケ・ダツケ・二つ三つという雲版・親と双盤・子の掛け念仏で、前佗は宗々利・地・三ツ地↓宗々利・地・レンゲ↓宗々利・地・流し↓宗々利・地・大流し↓早打ちと鉦を打つ。名称はかわっているが楷定念仏の歌念仏・掛け念仏に鉦の叩きの構成は同じで鉦の叩きが複雑になっている。法要中「六拾勤」が雲版と双盤で称え、「早宗々利」などの鉦を入れる。最後に雲版による送り鉦が叩かれる。

雲版延享三（一七四六）年、双盤鉦、明和七（一七七〇）年、宝暦五（一七五五）年、昭和三十一年・昭和三十五年  
双盤銘 江州市三宅村安楽寺忍誉代 明和七寅天三月 鉦講中（墨書） 西村  
雲版 市三宅村安楽寺什物 □誉寄付 延享三年丙寅季三月

## 8 称名院 滋賀県守山市小浜

（一九九九／五／一五調査）

五月十五日の御忌に鉦講を行う。雲版太鼓と六枚の双盤鉦がある。双盤鉦は袴を付けた中学生が叩く。法要の始めに「座付き念仏」法要中に「六字念仏」に雲版と双盤により称えられ、法要の終りに雲版による「送り鉦」が叩かれる。双盤鉦一枚に正徳五（一七一五）年の八日市場弘誓寺の鉦がある。他に昭和十一年四枚・銘なし一枚。

双盤銘 正徳五未歳八月十五日 弘誓寺什物  
雲版 文政五（一八二二）年支え台 文化三（一八〇六）年。

## 9 正福寺 滋賀県湖南市甲西町

(一九九八/一一/二三調査)

奈良時代からの古刹であるが昭和二十二年清寿寺と永厳寺を合わせて正福寺とした。

四月二十九日の御忌と十一月二十三日の十夜に在家の人が楷定念仏を行う。楷定念仏の歌念仏は僧侶の入堂・退堂の時に雲版双盤で称え、法要の中では六字詰めを雲版で叩き参詣者と唱和して称える。六字詰めは彼岸、葬式のお逮夜・四十九日の満中陰にも称える。秘仏大日如来の開帳が三十年に一回あり、その法要中開帳で戸帳を上げる時に楷定念仏を称える。近くは平成二年に行ったが、その時の二十歳の人から鉦講に入る人を選び三十年間勤めてもらう。双盤二枚享保二〇(一七三五)年、元文五(一七三七)年、雲版 弘化三(一八四六)年

双盤銘 江州下甲賀郡石原庄正福寺西村清寿寺什物 享保二十卯十二月吉日聖嘗壽統代 京大佛師 西村左近宗  
 春作 江州甲賀郡正福寺村永厳寺什物忍嘗宣廓代元文五年甲歲正月吉日 合鉦講中九人 京室町住出羽大掾宗□作  
 雲版銘 弘化丙年月

## 10 法性寺 滋賀県甲賀市信楽町宮町

(二〇〇二/六/二調査)

信楽町の盆地にある寺で御忌法要を三年に一回、西香院と交互に行っている。したがって法性寺は六年に一回盛大に御忌が行われる。一日の日程は午前開白法要と説教、午後回向・説経・日中法要が行われる。説教師の入退堂、法要時の僧の入退堂に楷定念仏が称えられ、法要中の念仏一会では六字詰めが称えられる。楷定念仏は楷定念仏とも書かれている。僧侶や説教師が着座するので座付き念仏、最初に歌念仏があるので歌念仏ともいう。雲版太鼓を親、双盤鉦は二枚で子とされている。

歌念仏 ↓ 武掛<sup>ぶが</sup>け陽陰 ↓ 座掛<sup>ひなたひかげ</sup>け陽 ↓ 陰 ↓ 流れ(こ)まで親と子の掛け合い) ↓ 小流れ・二つ拍子・一つ拍子・小流れ・

三つ拍子・小流れ・大流れ・一つ拍子・小流れ・一つ拍子・三つ拍子・一つ拍子・小流れ

以上のような順になる。武掛け・座掛け陽陰は強く称える、弱く称えることで、鉦の何々拍子は他所の何々打ちに相当し、「流れ」はゆっくり叩くことなので叩き方の複雑化はあるものの、歌念仏↓掛け念仏↓鉦という構成は他所と同じである。六字詰めは南無阿弥陀仏の三唱を三度繰り返す。

双盤鉦 寛政六年（一七九四）年一枚、平成四年（割れてしまったので作り直し）雲版 昭和五十七年

双盤銘 江州甲賀信楽宮町村法性寺什物 寛政六甲寅年 京大佛住西村上総大掾宗春作

雲版 法然上人八百五十年慶 加藤茂三郎

## 11 浄西寺 滋賀県栗東市上砥山

（二〇一六／三／一四調査）

十一月第三日曜に十夜法要がありその時に鉦講をする。毎年知恩院の御忌に招待され双盤念仏を行う。雲版を「導師」、双盤を「後付け」とするが双盤鉦は雲版の合わせ鉦である。まず迎え鉦・前鉦として三念仏を導師が称える。ブー引き・ダー引きといって導師と双盤の掛け念仏がある。三つ三つの鉦・尾流し・蓮華クスシ・二つ二つ・一つ一つで前鉦は終わる。この間僧が入堂し、法要の中で六拾づめを双盤鉦四枚で叩き称える。六拾づめは三回の念仏でだんだん早くなり、そのあと七五三の鉦を叩く。送り鉦は雲版で僧の退堂を送る。

双盤鉦は一枚古いものがあるが銘なし。他昭和三十二年二枚。昭和二十四年一枚。

双盤四枚（年号なし一枚・昭和三十二年二枚。二四年一枚 雲版 昭和二十四年浄西寺浄西會昭和二十四年十一月

## 12 阿弥陀寺 滋賀県栗東市東坂

(二〇一六/三/一四調査)

金勝山阿弥陀寺は聖武天皇勅願寺として建てられた金勝寺の草庵であったものを隆堯上人が女人禁制の山の麓に建てて女人参詣の便宜を図った。近江の浄土宗寺院の中心であったが、織田信長の命により浄厳院が浄土宗の中心になり阿弥陀寺はその末寺となった。<sup>6)</sup>五〇年ほど前まで楷定念仏があった。

双盤鉦二枚。弘化二年(一八四五)年、雲版 大正七年

双盤鉦銘二枚同じ 江州栗田郡金勝東坂村阿弥陀寺什物 弘化二年巳年十月至誓上人 御代施主鉦講中 (墨書 大極上尺

式□□ 雲版大正七年四月清誓代

## 13 心光寺 滋賀県甲賀市水口町城東

(二〇一五/三/一四調査)

心光寺では楷定念仏を七月五日吞龍上人の縁日に行っている。双盤鉦が八枚あり、雲版と太鼓を中心に四枚四枚に鉦を並べて称える。楷定念仏は僧の入退堂に称えられ、雲版と双盤の掛け合いになる。五〜六分くらいである。法要の中の六字詰めは雲版が行い一〇分程度要する。

楷定念仏は以下の通りである。三遍返し↓二遍返し↓ブガケ↓ダガケ↓二つ二つ↓一つ三つ↓大ソソリ↓ナガシ↓小ソソリ↓三つ一つ↓一つ三つ一つ三遍返し↓掛け念仏↓鉦の構成は他所と同じだが、二遍返しが入り、鉦の叩きが複雑になっている。鉦は青年会が叩く。

双盤鉦 享保三(一七二八)年のもの二枚・雲版 昭和八年

14 森紅寺 三重県伊賀市下友田

(二〇一五／八／六調査)

滋賀県の旧甲賀町から三重県伊賀市阿山地区(友田組)にかけての浄土宗寺院では八月の施餓鬼の時に僧侶が双盤鉦で「六字詰め」を称える。伊賀流・甲賀流で異なるものの、大方は片鉦一枚で叩く。この地区の施餓鬼はその年に亡くなった人の個人施餓鬼と地区ごとの組施餓鬼が一日かけて行なわれ、施餓鬼法要の終わりに僧侶だけの法要があり、その時に「六字詰め」が称えられる。他に葬式・五重相伝の時にも「六字詰め」で双盤を叩く。

双盤鉦一枚 安永四(一七七五)年

双盤銘 伊賀友田村佛蓮山日泉寺什物乗嘗代施主三ヶ村惣檀中 安永四未年八月日 京大佛住西村上総大掾宗春作

15 平泉寺 三重県伊賀市西湯船

(二〇一五／八／六聞き書き)

平泉寺は阿山地区の古刹であるが享保十一(一二二六)年双盤鉦一枚が残っている。施餓鬼に叩いた。

双盤銘 享保十一年十一月 京大佛住西村左近宗春

16 蓮華寺 滋賀県米原市番場

(二〇一五／八／五調査)

滋賀県米原市番場の蓮華寺は番場時衆として有名で一向上人が再興した寺である。昭和十七年より浄土宗に属したが、それまでは時宗一向派の総本山であった。同じく山形県天童市の仏向寺も一向派であり踊り念仏で有名である。この踊り念仏は蓮華寺より伝わったとしている。仏向寺では十一月の踊り念仏の時に名越流の双盤念仏を称え

る。この蓮華寺にも双盤鉦が一枚あるが、使い方については不明である。双盤鉦宝曆六（一七五六）年

双盤銘 八葉山蓮華寺常什物三十一世同阿一願代 寄進主塔頭若坊中 宝曆六丙子年正月

17 法界寺 滋賀県大津市堅田町真野 (一九九八／一〇／一五・二〇一六／三／一四調査)

真野のの法界寺は六齋念仏で有名であるが、ここに双盤念仏もあつた。<sup>⑦</sup>『民間念仏信仰の研究 資料編』（隆文館、一九六六）によると彼岸・盆・御忌・十夜に称えられた。平鉦・回向鉦・和讃があり、回向鉦にはヤク鉦がついた。滋賀県の湖東に広がる楷定念仏系とは異なり、写真では雲版太鼓はなく、二枚の双盤鉦を二人で叩いている。鉦は宝曆十二（一七六二）年と昭和八年の二枚。

双盤銘 湖西江州滋賀郡真野中村慈光山法界寺常什物 物念仏講中 宝曆十二壬午十月十五日寛誉上人代 京大佛住西  
村左近宗春作 滋賀県滋賀郡真野村慈光山法界寺什物満誉代 為法誉教信融範禪定門菩提  
昭和八年三月施主大西平吉兄弟中（墨書）京大佛住西村左近宗春作

### 三 京都府

18 真正極楽寺（真如堂）、京都市左京区浄土寺真如町（一九九二／一一／八・一九九七／一二／二三・一九九八／一〇／一五・一九九八／一一／一五・二〇一三／一一／八・二〇一四／一一／二二・二〇一四／一一／一五調査）

真正極楽寺（天台宗）通称真如堂は十夜法要を始めた寺として有名で、すでに多くの論考があるので、<sup>⑧</sup>現行儀礼

を記す。十夜念仏は現在僧侶の行う十月十四日から十六日の引声阿弥陀経会と十一月五日から十五日に在家の鉦講の行う十夜念仏に分かれている。鉦講は双盤鉦八枚で行う。

『十夜念仏縁起』（天和二「一六八二」年）によれば当初の念仏は引声念仏である。引声念仏は引声阿弥陀経会として途中断絶しながらも延享年間（一七四四～四八）伯耆大山の譜によって再興し伝わっている。現行のものは多紀道忍が昭和五年制作した譜による。<sup>9</sup> また明応四（一四九五）年天台宗である真如堂の念仏が勅許により浄土宗鎌倉光明寺に伝わり現在にいたっている。これも引声阿弥陀経と引声念仏である。双盤鉦の初見は全国的に見て元禄期頃からとみられるため十夜念仏への双盤鉦の使用はそれ以降<sup>10</sup>である。鉦講となるのは福持論文によれば天明四（一七八四）年の「六萬唱鉦講過去帳」ができる時点と推定している。同様に鎌倉光明寺十夜法要の六字詰め念仏は光明寺史料から享保年間頃（一七一六～四六）と推測できる。<sup>11</sup> それでは鉦講の十夜念仏はどのような経緯からできたものなのであろうか。楷定念仏地区と比較して考えよう。

鉦講の十夜念仏は十一月五日から十五日までであるが、五日夕刻五時から開帳法要があり、十五日昼二時から結願法要、五時から閉帳法要がある。この三法要は法要に伴って十夜念仏が行われるので特別である。他の六日から十四日は夕刻より称えられている。滋賀県に広がる楷定念仏系と比較してみると「笹づけ」は楷定念仏の「座付」の叩きで、「地念仏」は「歌念仏」「三遍返し」の回数を減らしたものと考えられる。「地念仏」を八人が一人一人称える。

次の「佛かけ」「陀かけ」は掛け念仏と同じであるが、これも八人個々の掛けを行うので時間がかかる。「三ツ地・四ツ地」は「三ツ打ち・四ツ打ち」「三ツ拍子・四ツ拍子」などと言われる鉦の叩き方、強打をいくつ入れるかを数える。「定の入り」は「流し」といわれるゆっくり叩くところである。以下の鉦のうちかたは「そそり」は滋賀

県でも見られが「うちわけ」「たぐり」など真如堂独特のものが見られる。楷定念仏系地区では雲版に双盤鉦が合わせ鉦として叩かれていたが、双盤鉦のみの叩きになって雲版はない。

五日の開帳法要は僧侶の入退場に「笹づけ」をたたき、法要の最後に「佛かけ」から「たぐり」を行い、僧侶の御十念をはさんで退場の「笹づけ」を叩く。

十五日の結願法要は二時に始まるが、一時半に鉦講の人が鐘楼の大鐘を二三回鳴らし、「笹付け」で山伏を先頭に稚児御詠歌講の行列が入堂し、その入堂を堂内の半鐘で合図する。「佛かけ」から「定の入り」までの間、行列着席・僧着座する。「追かけ」の時半鐘との掛け合いになる。法要の最後に「大鉦」より「たぐり」まで僧の御十念のあと「笹つけ」で退堂する。五時からの「開帳法要」は「開帳法要」と同じであるが閉帳に『十夜縁起』の読み上げがあるので、「笹付け」に続いて「たぐり」まで叩く。

以上のように僧の入退堂に「笹つけ」を叩き、「地念仏」を各人が称え、「掛け念仏」に入り、「大鉦」以降鉦の叩きのみ法要の最後「笹付け」を叩いて送る。楷定念仏地区では入退堂に鉦を叩き音頭と大衆の掛け念仏を三遍称え鉦の部分に入る。校正は同じであるが、各人の称える地念仏が長くなっている。鐘の叩きもそそり打ち分け等技巧的な叩き方が入ってくる。法要の中の念仏は楷定念仏地区では「六字詰め」であったが、それがなく一部分を称え叩くようになってきている。昭和十二年のNHKで放送した時の記録があるが閉帳時に「六字詰め」とあり当時は称えられていたとみられる。現在、結願法要の念仏を「回向鉦」といい、名前のみが残った。このように楷定念仏地区との共通点があるものの六字詰めが消え、個人の詠唱や叩きの技巧（「そそり」は下から上へ、「たぐり」はたぐりよせるように叩く。）の複雑さが加わって独自に発展したものと考えられる。

衣装箱に「真如堂 鉦講中 西組 慶応元（一八六五）丑十月」の箱書きがある。

双盤鉦は八枚。一番鉦銘なし。二番鉦七番鉦 明治十九年拾月(内一枚に東西鉦講員の名が縁と側面に彫られている。(墨書) 真如堂。真如堂西村上総大掾。八番鉦昭和六十年

19 百万遍知恩寺 京都市左京区田中門前町

(一九九八/一一/一五・一九九九/一二/三三・二〇一〇/一四/一一/二二・二〇一六/五/一五調査)

知恩寺は法然上人が通つたとされる賀茂の河原屋を前身とする寺で後醍醐天皇の時に八世善阿上人が疫病を百万遍念仏で除き寺号と大念珠を授かつた。以降この数珠繰りを広め、現在でも毎月十五日百万遍大念珠繰りを行っている。百万遍の念仏を称えることは平安時代に始まっている。当初一人で唱えた念仏も融通念仏の影響で多人数が同時に称える念仏になった。念仏を短く称えることを嫌うことから、引声の念仏であつたとされる<sup>(1)</sup>。

知恩寺では二枚の双盤鉦を一人の僧が両手で打ちながら、はじめは引声の念仏でだんだん早く称え、大数珠もそれに伴って早く廻すようにして終わる。南無阿弥陀仏の六字をだんだん詰めて早くすることから六字詰めという。これは多くの人が融通して百万回の念仏を称えるとする融通念仏で、楷定念仏とは異なるものと考えられる。

この双盤鉦を伴う六字詰め百万遍は百山系といわれる滋賀県甲賀郡の知恩寺末の寺に広まっている。  
双盤鉦二枚 宝永五年(一七〇八)年(追刻享保十四「一七二九」年)、享保二十(一七三五)年

双盤鉦 宝永五戊子曆正月七日知恩寺四十三世然誓直到代(追刻) 享保十四年巳酉年三月廿五日 一萬日回向替之正 施主  
富山氏 四十五世性誓浄阿代 為念誓浄仙 奄主誓光比丘尼二親菩提也 施主富山氏孝子等

享保二拾卯年三月吉日 城州紀伊郡竹田村慈眼寺観音寺準誓代鐘講中 京大佛師西村左近宗春作

## 20 知恩院 京都市東山区林下町

(二九九九／四／二四・二〇一六／二／一〇調査)

浄土宗総本山の知恩院では現在双盤鉦を使用する法会はない。御忌の時は笏念仏である。史料では明和二(一七六五)年天樹院(千姫)の百回忌に「双盤念仏一会」とあり叩くことがあった。昭和三十六年に知恩院の法儀士会で法然上人七百五十回忌に合わせて寺院によってばらつきのあった楷定念仏を「昭和新定」として統一した。滋賀県下で「知恩院法式研究所」として流布している譜はこの時のものである。

現在四月の御忌に滋賀教区の野洲組と甲賀組から何組か在家の楷定念仏の奉納がある。双盤鉦は四枚で昭和三十六年の法然上人七百五十回忌に寄贈されたものである。

銘 元祖法然上人七百五十年記念相見院智誓妙華喜悦大姉菩提滋賀八日市徳円寺檀徒 京都高田新吉 大西仏具店

## 21 誓願寺 京都市中京区新京極桜之町

(二〇一六／二／九調査)

新京極にある誓願寺は和泉式部の寺と信仰を集めているが、浄土宗深草派の総本山であり、深草派の寺院が新京極裏手の通りに立ち並んでいる。誓願寺に双盤鉦があり、戦後まで秋のお十夜の時に在家の人が叩いていた。近年使用されることはない。

双盤鉦二枚安永七(一七七八)年、文化四(一八〇七)年、二枚の鉦の音が異なる。

双盤銘 文化四卯冬 奉本山誓願寺如来前 願主大黒屋弁女繩手鍋屋久兵衛取次為妙与清雲法与受観栄信永観 慶寿女桂  
林光清 清与浄安輝与浄観清光戒与香観浄薫真月恵光 先祖代々親眷属追善  
洛陽本山誓願寺御影堂堂住 于時安永戊戌年十月佛日 京大佛住西村上総大掾宗春作

22 清涼寺 京都市右京区嵯峨釈迦堂藤ノ木

(二九九八／四／一九・二〇一六／三／一五調査)

清涼寺は齋燃のもたらした梅檀の釈迦像で有名である。円覚上人が融通念仏を行った寺で謡曲『百万』に話として伝わっている。融通念仏の流れを引く嵯峨堂大念仏は三月十五日涅槃会・四月十九日お身拭い・八月十日虫干し・十月十日物故者供養・十二月十日に大鉦(鰐口)一枚と小鉦一二枚で念仏和讃を称える。四月に境内の狂言堂で嵯峨大念仏狂言に行われる。四月十九日のお身拭いは浄布で釈迦像を拭う行事であるが、その時須弥壇脇にある双盤いんじょうによって引声いんせう念仏が称えられる。二枚の合わせ鉦で僧侶が両手で叩く。これは楷定念仏とも百万遍の念仏とも異なる。引声いんせうで南無阿弥陀仏を称える。

双盤鉦は二組四枚ある。天保七(一八三六)年二枚・享保元(一七二六)年二枚

双盤四枚 天保七年・享保元年 西光寺

23 粟生光明寺 京都府向日市粟生

(二九九八／四／二四調査)

粟生の光明寺は西山浄土宗の総本山である。西山派の祖証空上人は念仏を唱えるには「白木に為り返る心」をもつて称え、「凡夫なる故に何のいろどりもなし」とした。西山派ではこれを白木念仏として現在に伝えている。白木念仏の逸話は『法然上人行状図絵(四十八巻伝)』の四十七巻に載っている。この絵巻のできた南北朝の十四世紀の中ごろには白木念仏なる語があり、この精神に沿うような念仏がなされたと考えられる。この念仏がどのようなものであったかは、はっきりしないが南無阿弥陀仏を称える、その名のとおり単純な念仏の繰り返しであった

ことは想像できる。現行の西山派の白木念仏は双盤鉦を二枚向い合せにして叩くものであるが、十一称四十八打と  
 いて、念仏を十一返繰り返しその間四十八回の鉦を叩く。法要の最期の引き鉦に使用する。上田良準によると初  
 期の念仏は如法念仏であった可能性が高いが、十一連称になったのは双盤鉦が入った時からではないかとしている。  
 ちなみに白木念仏として差定に出てくるのは、万延元（一七九一）年としている<sup>15</sup>。西山派独特の念仏といえる。

光明寺の四月二十五日の法然上人の御忌では御影堂で行う。西山派の諸寺院では御忌、西山忌（証空上人の命日）  
 十月二十六日に白木念仏を行う。

双盤二枚 明和三（一七六六）年、享保二十一年（一七三六）年

24 安養寺 京都府久御山町東一口<sup>16</sup>

（一九九九／三／一一・二〇一三／七／二七・二〇一五／三／一四・二五調査）

一口は巨椋池の東流水口にある漁村で池の自然堤防上に家並みが連なっている。そこにある安養寺は弥陀次郎登  
 心譚で有名な寺院である。三月十八日に近い土日の春祭（観音の開帳）に鉦講が行われる<sup>16</sup>。十七日は初夜で夜十時  
 半から、翌十八日は朝五時に開帳法要、午後一時半に日中法要、午後四時に日没法要で閉帳して終わる。鉦講は十  
 人からなり双盤鉦も十枚で本堂右側に設けられた鉦座に横並びにすわり、「カシラ（頭と書く）」は下手に座り、親  
 鉦で音頭をとる。残り九人は「側」という。鉦講は毎法要時に僧侶の入堂前に称える「前鉦」と法要中に称える「六  
 字詰め」がある。「六字詰め」を称えることを「勤行」ともいう。法要の終わりは「送り鉦」で、流し叩きで送る。  
 真如堂と似ているが、ここでは「六字詰め」が残っている。

前鉦は持念仏——南無阿弥陀仏四唱×十人の各人の称え プ掛け・ダ掛け（大鉦・小鉦）——頭と側の掛け念仏で

大鉦・小鉦で叩き方を変える。一文字―頭が声をあげて称える

役鉦―鉦の叩きで三つ鉦↓ソソリ↓シコロ↓大流し↓蓮華くずし↓ソソリ↓三ツ鉦の順。

六字詰めの場合　ブ掛け↓ダ掛け↓役鉦（ソソリ↓三つ鉦↓シコロ↓大流し↓ソソリ↓三ツ鉦）である。

十八日の開帳法要では観音の戸帳を上げて開帳する時に六字詰めを称える。また法要の途中「十種供養」といつて以下のもの（線香・赤ろうそく・生花・お茶湯・段盛り・水仙・桜・木蓮・牡丹・萩・百合・菊・桔梗・薔薇・椿・御前）を寺の役員が須弥壇に手渡しに須弥壇に供えるが、その時も六字詰めである。季節の花は造花で段盛りは文旦みかんである。

六字詰めは彼岸・十一月十四日の十夜に阿弥陀堂で開帳・閉帳時に僧侶によって二枚鉦で叩かれる。葬式毎月十七日の数珠繰りには伏せ鉦で六字詰めを称える。

双盤鉦一〇枚一枚宝曆二（一七五二）年、他九枚昭和二十九年　双盤台明治三十二年。雲版なし。

双盤鉦一枚　寶曆二壬申天二月吉日山城国淀東一口村安養寺常什物　施主同村若仲間威養代　京室町住大掾宗味作

## 25 長福寺 京都府大山崎町円明寺

（一九九七／九／七・二〇一四／三／二三調査）

大山崎町の円明寺地区には真言宗の円明寺と西山浄土宗の長福寺・栄照寺がある、また隣の下植野には正覚寺という西山浄土宗の寺がある。この西山浄土宗の三ヶ寺には鉦講があつたが、現在長福寺のみに残っている。<sup>①</sup>この双盤念仏を「地念仏」といい春秋の彼岸の中日と十一月の十夜に行く。昔は借りて八枚鉦で叩いたが現在四枚で叩いている。一番鉦を「調子」他を「子方」最後の鉦を「音鉦」<sup>おんがた</sup>という。鉦講は十六人いて四年交代で叩く。打ち方は

以下のとおりである。真如堂の念仏を習ったと伝えている。

地念仏↓だがけ↓ぶがけすらし↓おくぶがけ↓大ながし↓みよとがね↓一つびようし↓じすらし↓三つびようし↓れんげくずし↓入り音（いりごと）↓小ながし↓きざみ↓しもの一つびようし↓しものすらし↓しもの三つびようし↓一つびようし↓おわり

地念仏は僧侶の入堂前に行われる。地念仏が終わってから法要が始まる。

入り音とは撞木を逆を持ち柄の部分で軽く叩くことをいう。鉦は供出したため戦後新調した。昭和二十三年二枚・昭和三十六年二枚・昭和四十五年二枚・平成八年二枚・計八枚。雲版なし。

双盤銘 乙訓郡大山崎村字円明寺 長福寺鐘講 先祖代々為（個人4名記） 尼講一同 昭和二十三年五月吉日

昭和三十六年元祖法然上人七十五御忌 昭和四十五年落慶記念

平成八年十一月西山上人七五〇回御遠忌記念 菩提（個人名記）

## 26 極楽寺 京都府京田辺市天王

（一九九九／九／五・二〇一四／五／一四調査）

十一月十四日の十夜に双盤を叩いた。現在極楽寺に一枚あるが、年号はない。双盤念仏の順は以下の通りである。  
 三言<sup>みこと</sup>返し<sup>がえ</sup>南無阿弥陀仏三唱三回↓下<sup>さげ</sup>くずし三唱一回↓四辻―鉦を七五三に叩く↓八辻・三辻―鉦の叩き方↓おおせめ―本尊にお茶湯を供える。尼講では春秋彼岸に伏せ鉦で六字詰めを称える。

双盤銘 天王山極楽寺什物 筑後常時作

27 深廣寺 京都府城陽市奈島久保野

(二〇一四/五/一四調査)

深廣寺は御忌や十夜に双盤鉦を叩いていたが絶えてしまった。現在双盤杵が二基残されており、一基には鏡面二八cmの脚付きの安永四（一七七五）年の鉦が吊り下げられている。伏せ鉦用とみられるが、伏せ鉦としては大きめである。また鉦講の時に踊りがあったといわれ吊り下げ紐のついた鉦鼓がある。

吊り下げ伏せ鉦銘 安永四乙未年 城州綴喜郡奈嶋村深廣寺什物 為以音了津菩提 西村上総大掾宗春作

四 奈良県

28 奈良市柘植白石 興善寺<sup>18)</sup>

(一九九八/一一/一〇・二〇二三/一一/一〇調査)

興善寺は融通念仏宗の寺で平野の大念仏寺からの御回在が三年に一度、また興善寺の御回在が毎年十二月にある。興善寺の鉦講は檀家の有志からなるが、在家受戒の「傳法」を受けた「禪門講」の人と重なる。双盤の音頭取りをカシラ（頭）、受け手をオトという。カシラは須弥壇に向かつての右、オトが左に座る。法要では堂内の蟬燭の番、装具の管理などの裏方の仕事を担う。

鉦講は八月六日、十五日の施餓鬼、二十四日の地藏盆、十一月十日の十夜に行われる。

十一月十日の十夜は一八時頃から鉦講をはじめ関係者が庫裏で食事をとる。一九時から興善寺住職の挨拶と布教師による法話があり、二〇時ごろから二二時ごろまで塔婆回向と新亡回向がある。その後再び布教師による法話があり、参詣者に御供撒き<sup>こくま</sup>といって餅が配られる。住職による本回向が続き、二三時を過ぎた頃に数珠くりと御本尊頂戴の行事がおこなわれる。御本尊頂戴は、僧侶が御本尊（天得如来）の掛軸入った箱を檀家の肩に触れ、家内安

全・無病息災を祈願するものである。参詣者の本尊頂戴が終了したあと、小豆粥がふるまわれる。また「お骨おさめ」といって、ここ一年以内に亡くなった人の骨や遺物（のど仏の骨や髪の毛や爪）をこの時に小さな箱にいれて、本堂脇の納骨堂（部屋）に納める。

双盤鉦は次のように行われる。

一八時（双盤念仏）・夕食接待 一九時 御法話（迎え鉦・送り鉦）

二〇時（双盤念仏）新亡回向・新穀感謝・塔婆回向（送り鉦）・御供撒き 二二時 御法話（迎え鉦・送り鉦）

二三時（迎え鉦）本廻向（回向鉦）・念珠繰り（双盤鉦）・御本尊頂戴（送り鉦） 二四時 小豆粥接待

双盤念仏はまず一八時に叩いて、一九時に布教師の迎え鉦を叩き、法話が終わると送り鉦を叩く。二〇時の迎え鉦はそのまま僧侶の新亡回向につながる。新亡回向に続く塔婆回向は一本一本の供養があるので一時間ほどかかる。塔婆回向が終わり送り鉦が叩かれると、ここで御供撒きの餅とミカンが配られる。次の二回目の法話にも迎え鉦・送り鉦を叩く。本回向は迎え鉦が始まり。途中双盤念仏の回向鉦が入る。本廻向が終わると、鉦台の向きを変え、念珠繰りの準備をする。念珠繰りは百万遍念仏であるが、始めは僧の般若心経で途中から鉦講の鉦と念仏に合わせ、数珠を回す。それから御本尊頂戴で、鉦講の一人が本尊掛け軸を持つ僧の先導に蠟燭を手に堂内を巡り、最後に送り鉦をたたく。

一八時と二〇時の双盤念仏は地念仏から三ツ鉦までで一〇分程度である。迎え鉦も同じく地念仏から三ツ鉦までで、送り鉦は最期の鉦を叩く部分のみである。本回向の回向鉦は光明遍照の偈に重ねて鉦講は「ナーマイダー」と唱えて回向鉦を始める。上人はこの間、「融通念仏ナムアマミダ」を唱えている。鉦講は九ツ鉦から三ツ鉦までで、次に僧の「願以此功德——」という総回向と内外（ないげ）十念を唱え、本廻向は終わる。

(前座・迎え鉦) 撞木合せ↓地念仏(各三回) ↓佛がけ念仏(各一回) ↓陀がけ念仏(各一回)

ナアパイダアハイ↓九ツ鉦↓七ツ鉦↓三ツ鉦

(回向鉦) 光明遍照 十方世界 念佛衆生 撰取不捨

ナアパイダアハイ……………以下三ツ鉦迄

(送り鉦) 九ツ鉦↓七ツ鉦↓三ツ鉦

双盤二枚 享保十(一七二五)年。

双盤銘 享保十乙巳天和笏山邊郡白石大栄山興善寺什物 第十九世見亮代 能本生願信士也 施主牟山村平七 (墨書)

□佛住西村左近宗春作

享保十乙巳天和笏山邊郡白石大栄山興善寺什物 第十九世見亮代 為淨解信士妙安信女也 施主當所源重良 (墨書) □佛住西村左近宗春作

29 西念寺 奈良県天理市福住

(二〇一四/一一/一三調査)

都祁白石からそう離れていない西念寺(融通念仏宗)に鉦講がある。福住の鉦講は一度中断したが昭和三〇年ころに興善寺から習い復活した。したがって儀礼は興善寺と同じである。十夜は十一月十三日で昼行われ法要後百万遍がある。興善寺・西念寺は在家が二枚で叩くことが特徴である。

双盤二枚 年代なし (墨書二枚同じ) 東室町出羽宗味誠定作

## 五 大阪府

## 30 大念仏寺 大阪市平野区平野上町

(一九九九／一〇／八・二〇〇〇／一／一六調査)

大念仏寺は融通念仏宗の総本山で、一月・五月・九月十六日に本堂で百万遍の数珠繰りを行う、その時二枚の双盤鉦と伏せ鉦で僧侶が念仏を称える。

(百万遍時) 双盤二枚

## 31 瑞寶寺 大阪府阪南市自然田

(二〇二三／七／一四二二〇一三／八／三調査)

阪南市の浄土宗寺院には回番御忌があり、一〇カ寺で一巡する。阪南市で双盤念仏の残っていた寺院は回番御忌の寺に多い。瑞寶寺もその一つで、近年では二〇一四年四月に回番御忌をおこなっている。この時山門に櫓を組んで双盤念仏が称えられる。毎年彼岸中日、八月三日施餓鬼・十五日盆・二十四日盆踊り、十一月二十三日十夜、毎月二五日元祖講には本堂で称えられる。講員は一子相伝で二三軒の決まった家の男子しか参加できない。入る時はイリク(入り組)といって一ヶ月ほど練習をする。双盤鉦はカシラとシモ二番く四番の四枚で四人が双盤台に座って叩く。叩き方称え方の名称はないが、始めにお十念で撞木を一文字に額にかざし、十念↓六字念仏↓掛け念仏↓セメ↓七五三打ち止め の構成になっているが、<sup>19)</sup> 円を描く様にして叩く撞木の叩き方に特徴がある。双盤念仏は法要の前に称えられ、双盤が終わってから僧が喚鐘を叩き入堂する。

双盤鉦二枚 元文三(一七三八)年、二枚昭和二十八年再鑄造

双盤銘 元文三戊午五月日年 為求法淨欣 誠嘗妙意終竟正臨慶嘗妙喜 施主芝野半九衛門敬白 京大佛住西村左近宗春作  
 元文三戊午五月日年 為求法淨欣 為誠嘗妙意 先祖法界 施主芝野半九衛門敬白 京大佛住西村左近宗春作  
 昭和廿八年十二月再鑄 施主古野平重 泉劬東鳥取村自然田 瑞寶寺(墨書) 音声改メ 大極上々 壹尺一寸  
 昭和廿八年十二月再鑄 施主松波正治 (墨書) 尺一寸 音声改メ 極上等 大極上々 壹尺一寸

なお阪南市の以下の寺には双盤念仏があり、譜がある。<sup>(20)</sup>

- ・黒田 黒田寺 地の念仏↓三返かえし↓落とし念仏↓せめ
- ・箱作 宗福寺 六字詰め↓ぶがけ↓回向(二つ攻め・ダガケ・二つ攻め・三つせめ) ↓回向四つ字↓江戸上↓三つ字↓大たぐり↓切金
- ・石田 裕道寺 念仏↓掛け念仏↓六遍返し 網引き念仏
- ・鳥取 西光寺 念仏↓ブかけ↓ダかけ↓念仏

## 六 和歌山県

### 32 報恩講寺 和歌山市大川

(一九九五／五月調査)

西山浄土宗の報恩講寺は法然上人が讃岐に流され、その帰途難破して大川の海岸に着いた所である。それにちなんで旧暦十月十八〜二十日、(新暦の十一月二十二日〜二十四日)に円光大師大会式が毎年あり、その時に双盤念仏が称えられた。大川流といい、大阪府の南部から和歌山県の北部に広まっている。参詣にきた和歌山市湊鉦講(昭和七年)・和歌山市中之島鉦講(昭和十七年)の奉納額がある。大阪の岸和田・淡輪からも来ていた。鉦は八枚で二枚鉦を四人で叩く。鉦は二枚を向かい合わせの鉦で両手でたたいた。

日中・日没・初夜と法要の前に交代で叩いた。戦後しばらく続いたが、現在はやっていない。

双盤鉦八枚 宝永七（一七一〇）年、享保二（一七一七）年 二枚・享保七（一七三二）年 文政四（一八二二）年 紀州

海士郡大川浦慈雲山報恩講寺什物

33 総持寺 和歌山市梶取

（一九九九／五／二三調査）

西山浄土宗本山の梶取総持寺は双盤念仏があり、梶取流<sup>かんぢり</sup>、デカン流として広まっていた。四月十四日の善導忌に叩かれ、周辺の鉦講が集まった。

双盤二枚

（戦後のもの）

34 阿弥陀寺 和歌山市鳴神

（二〇一六／五／一一調査）

浄土宗阿弥陀寺には藩主徳川頼宣が秀忠のために建てたとする寛永十年（一六三三）年の御霊屋が移築されている。双盤鉦一枚宝暦八（一七五八）年があるが、用途は不明である。

双盤銘 宝暦八寅天正月吉日

紀州名草郡鳴神村阿弥陀寺什物 勝誓玄柏□代

35 地藏寺 和歌山県海南町下津大窪

（一九九九／五／一四・二〇一六／五／一一・二〇一六／九／二三調査）

地藏寺は旧下津町大窪にあるが、有田川町の西山浄土宗禅長寺末で海南市の称名寺が兼務している。五月七日の

施餓鬼と春秋彼岸・巡回説教時に双盤念仏が現在でも行われている。下津町にある西山浄土宗の十三ヶ寺は昭和五十四年より輪番御忌を組んでいる。双盤念仏は「鐘講」ともいい四枚の鉦で大川の報恩講寺から伝わったといわれる。まず総代が半鐘で喚鐘を叩く。説教師の説教がある時は入退堂に「高座つけ」の双盤を叩く。法要の中では「回向」を称える。「上」<sup>かみ</sup>は音頭をとる人で一人、あとの三人は「下」<sup>しも</sup>で全般に上下の掛け念仏となえる。双盤の譜は次の通りであるが現在六字・四辻・回向が称えられている。

そうばんつけ↓六字↓ぶがけ↓かしらぬき↓ぶがけ↓ぶがけ↓地↓御つけ↓地↓二つぬき↓地↓よせよつじ↓回向↓もろうち。回向は六字詰めともいう。

和歌山県で双盤念仏が現在残っているのはここだけである。系統は真如堂の念仏に近く、西山派の白木念仏とは異なる。双盤鉦は四枚で一枚は正徳五（一七一五）年の古鉦である。他、昭和四十一年二枚、昭和五十六年一枚

双盤銘 紀勢海士郡加茂大窪村向釈山長福寺常住心空祖閑代 正徳五歳末ノ二月十五日 粉河蜂屋正勝作

36 常行寺 和歌山県海南市下津大崎

常行寺は双盤念仏を復興しようとして、近隣の寺から双盤鉦を集めている。現在九枚の鉦がある。双盤念仏は一度再興している。双盤鉦 正徳四（一七一四）年・寛保三（一七四三）年・宝暦八（一七五八）年・文化三（一八〇六）年二枚・明和三（一七六六）年・天明二（一七八二）年・他、年代なし

双盤銘 正徳四年五月十五日 施主藤岡庄右衛門年 粉河蜂屋正勝作 紀州海士郡大崎浦常行寺什物還誉代

(二〇一六ノ九ノ二三調査)

寛保三癸亥十一月日粉河蜂屋正勝 紀州海士郡加茂谷方村禪定寺十一世鑑誓代  
 宝曆八戊寅年三月日文化三年（一八〇六）二枚 粉河蜂屋正勝  
 明和三丙戌年三月十七日粉河薩摩捺蜂屋勝原正勝紀州海士郡加茂谷方橋本村阿弥陀寺什物  
 天明二寅年三月日 橋本村阿弥陀寺什物  
 文化三丙寅三月吉日紀州海士郡加茂下村極楽寺什物響誓代 先祖代々為家内一切精霊菩提 施主宮尾藤四郎（墨書）  
 粉河住蜂屋□□正勝  
 （同年他一枚）施主惣檀中并女郎幸次郎 加茂□市ノ坪村薬師 江戸西村和泉守作 銘なし（一枚）

37 得生寺 和歌山県有田市糸賀

（一九九四／七／一五・一九九九／五／一四・調査）

中将姫が継母に捨てられたとする雲雀山にある西山浄土宗の寺で毎年五月十五日に中将姫の大会式として二十五菩薩の来迎会が行われる。その時双盤念仏が称えられ、鉦も残っているが現在中断している。

双盤鉦 寛政二（一七九〇）年二枚・文化三（一八〇五）年、文化五（一八〇八）年、文化十五年（一八一八）年

双盤銘 寛政二庚戌歳年三月吉日 紀州有田郡糸賀庄雲雀山得生寺堅階上人代常什物 為松月順了信士松月妙了禪尼 先祖  
 代々菩提也 施主和歌山一半町岡崎屋嘉右衛門 武州江戸神田住西村和泉守  
 文化三子八月十八日有田郡西村延命寺妙照信女 施主元市太夫天保十二年村ヨリ求ム 粉河庄福井良□作  
 文化五寅三月吉日宮原組福勝寺常什物信空靈誓代 施主藤園半之右衛門（墨書）粉河住蜂屋薩摩捺源正勝作  
 文化十五寅三月吉日 宮原組福勝寺常什物信空靈誓代 施主 伊藤宗平次 粉河住蜂屋薩摩捺源正勝作

38 深専寺 和歌山県湯浅町湯浅

（二〇一六／九／二三調査）

湯浅の町中にある西山浄土宗の古刹で本堂は寛文年間のもの。双盤一基がある。正徳五（一七一五）年使途不明

双盤鉦銘 正徳五乙未南呂二十五日 紀州在田郡湯浅邑玉光山深専寺什具懷翁真衛代

為六親眷属菩提 寄進者法眼弥兵衛 粉河蜂屋正勝

## 七 兵庫県

### 39 常楽寺 兵庫県加古川市東神吉町神吉

(二〇一六)九/三二調査

兵庫県の加古川市高砂市近辺には浄土宗西山禅林寺派の寺が多く、二十六ヶ寺の禅林寺派の寺で善導忌門中を組み、四月の善導忌を順番に行っている。二十六年に一回、番寺が回ってくると大法要になる。常楽寺ではその時に双盤念仏を行う。毎年春秋彼岸と十夜に二枚鉦をたたく。双盤は鉦講の人が叩き、須弥壇に向かって左の人が上、左の人が下である。現在は発願文のあとに短く双盤念仏をいれるが、全体は次のようであった。

高座おり↓教啓(三念仏) ↓掛け念仏↓七五三↓前の五五三↓つづき↓後の五五三↓つづき↓回向鉦↓高座おり  
双盤鉦二枚 享保十二(一七二七)年。

双盤銘 享保十二丁未天閏正月日 為一誓宗感釈尼妙安紫空宗雲紫覚如雲觀月休意覚拳妙安 施主 神吉五郎左衛門太郎左

衛門太兵衛 播州印南郡神吉村法性山常楽寺什物 千隆和尚代 京大佛之住人西村左近藤原宗春作

(二枚目) 為松岳宗林 正宿了圓 一法休心 天空妙空 了空宣明 圓念法心 施主 神崎清左衛門 以下同じ

### 40 常福寺 兵庫県加古川市神吉大國

(二〇一六)九/三二調査

常福寺は常楽寺の孫寺で明治十三年の二枚の双盤鉦がある。使途不明で叩いたことがない。

双盤鉦二枚 明治十三年八月 播磨国印南郡大國村常福寺什物

41 龍泉寺 兵庫県加古川市加古川町平野

(二〇一六／一二／九調査)

龍泉寺も善道忌門中の一ヶ寺である。本堂に隣接して善光寺堂がある。阿弥陀堂善光寺として別の場所にあったものを移築した。善光寺仏も祀られている。双盤鉦二枚宝永六（一七〇九）年。

双盤銘

宝永六年己丑九月 播州一鱗山龍泉寺 俊廓上人代 施主布屋 一峯妙心

(二枚同じ) 京堀川住筑後大掾常味作

まとめ 以上の事例から次のようなことが言える。

- 一、楷定念仏・双盤念仏は僧や説教師の入退場に称え叩かれる。
- 二、法要の中で行われる念仏は「回向鉦」「役鉦」といい雲版・双盤を叩き念仏を称える。これを「六字詰め」というところが多く、楷定念仏とは別の念仏と考えられる。
- 三、楷定念仏の冒頭に唱えられるのは「三念仏・三遍返し」といい3×3回の念仏を称える。三念仏（歌念仏）  
↓掛け念仏↓鉦の叩きという構成は共通している。
- 四、京都真如堂・一口のように多人数の鉦を叩くようになったのは比較的新しいと思われるが、三遍返しを一回ずつ各人が称え叩くように変化している。

注

- (1) 坂本要「東京の双盤念仏」『史誌』一四号大田区史編纂室、一九八〇、「東京都双盤念仏調査報告」東京都教育委員会、一九九〇・「上和田の双盤念仏」『大和市史研究』二一八号 神奈川県大和市総務部総務課、二〇〇二、「神奈川県の大盤念仏」『民俗学論叢』二一九号 相模民俗学会、二〇一四・「入間市周辺と関東の大盤念仏」『入間市博物館紀要』一一号 入間市立博物館、二〇一五・「双盤念仏の分布と構成」『大通上人三百回御遠忌記念論集』法蔵館に〇一五・善光寺と名越派の大盤念仏」『仏教経済研究』四五号駒沢大学仏教経済研究所、二〇一六
- (2) 安土問答・安土宗論に關しては辻善之助『日本佛教史 近世篇之一』岩波書店、一九五二・中尾堯「安土宗論の史的意義」『日本歴史』一一二号吉川弘文館、一九五七・高木豊「安土宗論拾遺」『日本歴史』一六八号吉川弘文館、一九六二・河内将芳「安土宗論再見」『中世京都の都市と宗教』思文閣出版、二〇〇六
- (3) 浄敝院は正平年間(二三四六～三三六九)佐々木六角氏の氏寺慈恩寺として天台宗の密教様式の寺として建てられている。また境内には元禄一六(一七〇五)年に建てられた禪宗様式の不動堂があり、この期に禪宗の法具が使用されていたことも考えられる。滋賀県教育委員会文化財保護課『重要文化財浄敝院本堂修理工事報告書』、一九六七
- (4) 一説には天正四(一五七六)年、織田信長の安土城の開城を記念する「開城念仏」とする。平裕史「安土・浄敝院の楷定念仏」『民間念仏信仰の研究資料編』隆文館、一九六六参照。
- (5) 井ノ口泰温「観経疏楷定記改題」一九三四↓『西山全書第六卷』文栄堂書店、一九六四、所収
- (6) 『隆堯法印と阿弥陀寺・浄敝院』栗東歴史民俗博物館、一九九一・伊藤唯真「近江における浄土宗教団の展開」『仏教論叢』八号浄土宗教学院、一九六〇
- (7) 成田俊治「法界寺の大盤念仏」『民間念仏信仰の研究資料編』隆文館、一九六六、二四六頁に写真とともに報告されている。
- (8) 深見慈光「真如堂の十夜念仏」『民間念仏信仰の研究資料編』隆文館、一九六六・鷲見定信「浄土宗の十夜法要」『日本仏教』44号日本仏教研究会、一九七七・芹川博通「十夜法要―その習俗と課題―」『浄土宗の諸問題』雄山閣、一九八八・米田実「真如堂の十夜念仏」『京都府の民俗芸能』京都府教育庁指導部文化財保護課、二〇〇〇・福持昌之「真如堂における十夜法要と双盤念仏―僧侶の念仏から世俗の証講へ―」『宗教と社会』二二号、「宗教と社会」学会、二〇一五
- (9) 真正極楽寺真如堂「慈覚大師と引声阿弥陀経会」パンフレット参照
- (10) 坂本要「双盤念仏の分布と構成」『大通上人三百回御遠忌記念論集』法蔵館、二〇一五
- (11) 『檀林滝山大善寺誌』(文政四年一八二二)↓『浄土宗全書』二〇)所載の「滝山大善寺十夜勸進記」(文政三年「一八二〇」

年)に戦国末期滝山城にて戦死した亡魂を用うため開祖謄上人が十夜法会を開いたことを述べ、十一世廣誉上人が諸堂を再興し「いよいよ儀軌厳重に執行に至れり」とある。儀軌とは十夜法要の儀軌で、別に十一世中興廣誉上人について「寛文七(一六六七)年諸堂再建並二十夜を企二夜三日」とある。双盤鉦の最古は万治二(一六五九)年である。この期に儀軌を整備し双盤鉦が十夜に用いられ事が始まった可能性が高い。

※ 参考 坂本要二〇一六及び相原悦夫「瀧山大善寺の本末形成と浄土宗関東十八壇林への参入」『瀧山大善寺研究』一号二〇〇三「大善寺十夜の法会・縁日」『桑都民俗』第四号、一九八六、に寛文七(一六六七)年、大善寺は十一世廣誉上人が関東十八壇林の優位をたもつため「十夜法要儀則」を制定し、大善寺流双盤念仏の流儀を整えたとある。

(12) 福持昌之、二〇一五

(13) 坂本要、二〇一五

(14) 渡辺貞磨「百万遍念仏考―『台記』の場合を中心に―」『文藝論叢』二五号大谷大学文藝学会、一九八五

(15) 上田良準「白木念仏について」日本仏教学界編『仏教儀礼』平楽寺書店、一九八七・「白木念仏の法語と儀礼」『西山学报』

26、西山短期大学、一九七八

(16) 「東一口の双盤念仏」『京都の文化財』二八号 京都府教育委員会、二〇〇九、京都府無形民俗文化財に指定。

(17) 『円明寺の民俗―京都府乙訓郡大山崎町―』神奈川大学常民文化研究所、二〇〇二

(18) 都祁白石興善寺の報告は筆者の調査を含め「柘植白石興善寺の双盤念仏」『奈良県の民俗芸能』2(奈良県教育委員会二〇一四)六六〇～六六六頁に詳細を載せている。その十夜部分を略述改稿したものである。

(19) 『阪南町史 上巻』五一―四頁 阪南町史編さん委員会、一九八三

(20) 『大阪府の民俗芸能』大阪府教育委員会、二〇〇九

(21) 藤井弘章「大窪の民俗」『大窪の笠踊り調査報告』海南市文化遺産活用実行委員会、二〇一五